

<国際基盤力テストの分析結果>

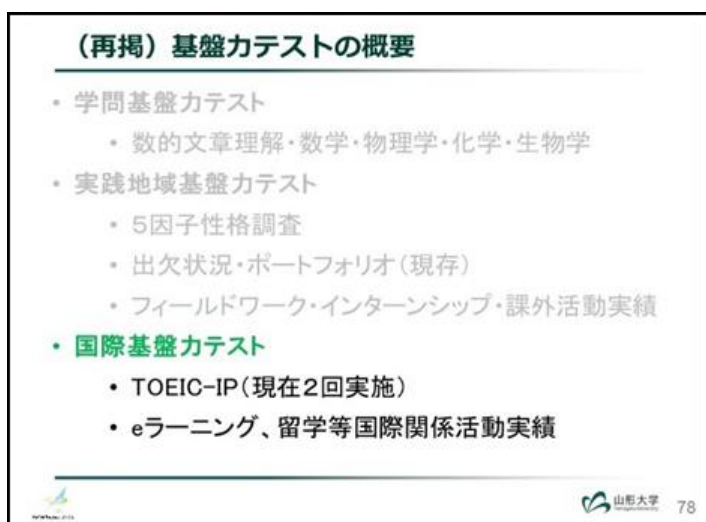
○浅野教授



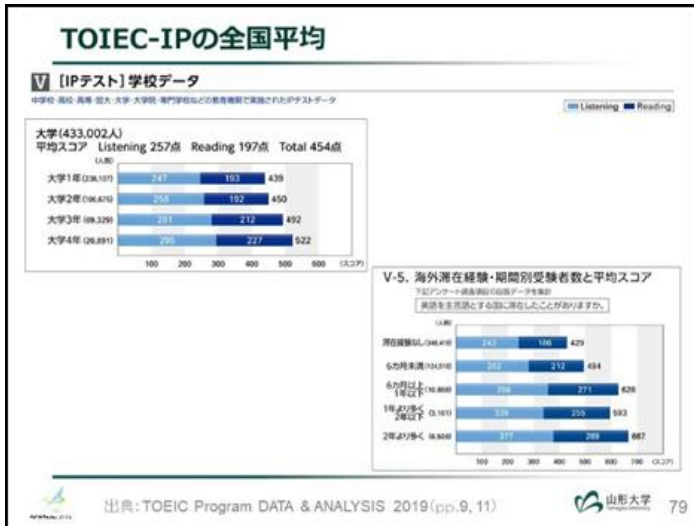
では、時間になりましたので、午後の部を再開させていただきたいと思います。まず午後の部ですが、プログラムでご覧いただきましたように、まず最初に私の方から簡単にこの「国際基盤力テストの分析結果」というものを御紹介したのちに、藤原先生から実際に基盤力テストの結果を用いて BI 化をするという試み。そして全体を締めくくる形で千代先生に総括、今後の展

望という形で述べていただきたいと思います。

ここから 15 分ほどいただいて私がお話しさせていただきますが、鋭い方は恐らく時間配分を見られて、この辺りは弱いんだろうなというふうにお察しいただけるかと思います。安田先生のパートは 1 時間、白石先生のパートは 30 分、私は 15 分ということですので、そこから想像いただければというふうに思います。若干言い訳も入りますので、その点よろしく願いいたします。



まず基盤力テスト、冒頭に御説明いたしましたように、こういった3つの形で組んでいます。午前中、この学問基盤力、それから実践地域基盤力というふうにお話ししてまいりましたが、私のパートでは、この三つ目の国際基盤力テストについてご説明いたします。



実際、TOEIC IP を使ってどういうことを考えているのかということを中心に御紹介したいと思います。こちらのスライドは皆様おなじみかと思いますが、TOEIC のプログラム概要ですね。日本全体では 2019 年度に受けた学生さん（大学生）が受けた TOEIC IP スコアを示したものです。大学 1 年生ですと平均で 439、大学 2 年生で 450、3 年生で 492、4 年生で 522 という形

で、これが日本の大学生の平均的なスコアという形になります。そして抜き出しているのが、海外留学の経験があるなしによってスコアがどう変わっていくのかというところです。全く経験がないとやはり平均値に近い状態ですが、少しずつ経験していくにつれてスコアが上がっていくということが結果から示されています。

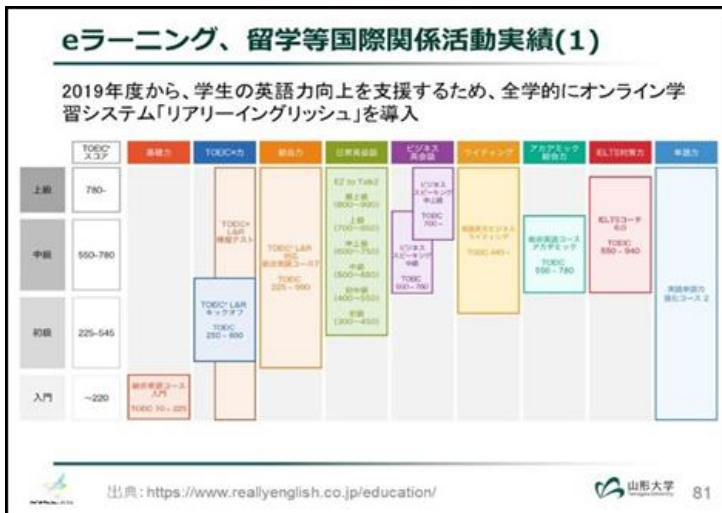
我々はこの発想を用いて、この国際基盤力テストで実施している TOEIC IP をどう使うかというのを考えているところではあります。ただ、資料については申し訳ありませんが、まだ学内での合意が得られていませんので投影のみとさせていただきます。

こちらが山形大学で過去 2 年間に実施している TOEIC の平均になります。2017 年ですと 428、2018 ですと 438.5。全国平均が 439 くらいでしたので、ほぼ平均に近いスコアは出ているものと理解しています。次に、ちょっと見にくくて恐縮ですが、学部ごとのスコアのボックスプロットになります。見ていただきますと、大体平均値が、学部によって位置が変わってきますが、低いところで行きますと 300、400 を切るようなところに平均がきているもの。高いところだと 600 に近いようなもの。また、この両端にある点ですね、それぞれの学部においてハイスコアを収めている学生の点を示していますが、大半がこっちの方に入ってきていますので、大体平均から低いところにある程度の学生のゾーンがいるという形になります。

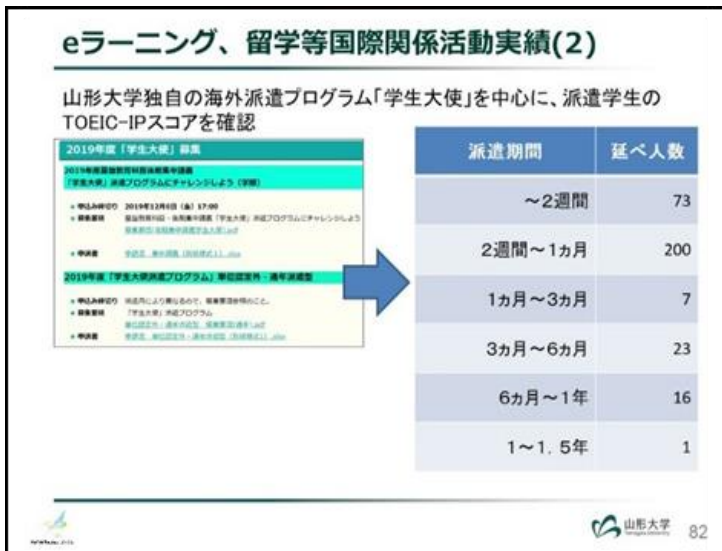
現在、山形大学ではこの TOEIC IP を、ある学部では 1 年生と 2 年生に、ある学部では 1 年生と 3 年生にという形で、2 回実施することになっています。残念ながら、現段階では 1 回目と 2 回目の比較というところにまだ行き届いていません。今後の予定にはなりますけれども、今年から来年にかけてこのあたりのスコアを比較して、伸び率を見ていくということになります。

一方で、TOEIC IP のスコアを使うときの留意点というのもいくつかあるかというふうに認識しています。これは日本の大半の大学でも恐らく直面されることだと思いますが、そもそも英語ですね。大学の英語というのは TOEIC IP のスコアを向上させるために行って

いるわけではありませんので、単純にこのスコアだけを見ただけで英語の教育効果が測れる訳ではありません。ですので、我々としては、これはあくまでも状況を確認する、モニタリングしていくための指標だというふうに位置づけています。



それはさておいて、実際に平均レベルにあるということですので、今年度から実施した取組として、オンラインの学習支援システム（リアリーイングリッシュ）の一部に、TOEICを意識して学習できる機能を導入し、学生が利用できるようにしました。今後、我々はこの学習歴なども見ながら、スコアの推移というのを見ていこうというふうに考えています。



もう一つが先ほどのスライドで御確認いただきましたように、海外留学を経験するとスコアが上がりやすいという結果を踏まえた検討です。山形大学の一つの特徴的なプログラムとして、学生大使というのがございます。午前中に御登壇いただきました、安田理事がかなり力を入れておられ、御自身が実際に授業に出向いて行って、学生さんに精神論も含めて語っていただいている授業になりますけれども、特色として、派遣先の大学で日本の文化を英語で教えるといったことをやっています。

そうすると、自分の学習、英語能力がどれくらい低いのかというのを学生さん自身が目の当たりにして帰ってきます。そうすると、大学の英語に熱心に取り組むようになります。ただ、派遣学生数というのが、今のところ山形大学でこういう数字になっていまして、なかなか安定的に追跡するというまでのサンプルは得られていませんので、あと2、3年データをためてですね、このあたりもどう見ていくのかということも考えなければならないというふうに理解してるところであります。

独自テストの研究開発

ニュージーランドのVictoria University of Wellington校、Averil Coxhead教授(Ph.D.)が開発した“The Academic Word List”(AWL)を参考に、語彙力テストのスキームを援用して、独自テストの研究開発を推進。

Sublist	AWL
1	analysis, formula, .. variables(60)
2	achieve, design, .. transfer(60)
3	alternative, implies, .. validity(60)
4	access, integration, .. sum(60)
5	academic, logic, .. welfare(60)
6	abstract, input, .. underlying (60)
7	adaptation, isolated, .. visible(60)
8	abandon, offset, .. widespread(60)
9	analogous, mature, .. trigger(60)
10	adjacent, levy, .. whereby(30)

Q1. a subdivision of a written work; usually numbered and titled

1. design
2. chapter
3. commission

詳細は、<https://www.victoria.ac.nz/bais/resources/academicwordlist>を参照
山形大学 83

ここからが今後の予定になります。独自テストの研究開発ということで、午前中に私の方から安田先生のパートで、若干ですけれども触れさせていただきました、語彙力テストの話と関連します。海外では、語彙力テストに類似の、アカデミックワードテストといったものが実施されています。これはTOEIC IPとは少し系統が違いまして、大学の授業で使われる学術的な英語の単語のテスト

になります。そういったものがございまして、私が調べた限りでは、このビクトリアユニバーシティ、ニュージーランドにある大学にご所属のコックスヘッド博士が、このアカデミックワードリストというのを開発されています。これはいわゆる英語の授業において、基本的に出てくる単語を収録されているものです。内容を御紹介しますと、こういった形で、レベル分けになっています。1が比較的簡単で、10が少し難しい。あるいは頻度が少ないというかもしれませんが、こういったものがそれぞれ準備されていまして、ここに括弧書きで書いていますが、サブリスト1に60、サブリスト2に60という形で、トータルで570の用語が準備されています。

我々はこれを参考にしながらですね、例えば「YU ポータル」で実施する場合は、このような設問にできないかということで考えているところです。まだ研究開発段階ですし、必ずしもこのアカデミックワードリストというものだけでいいのかというのは、これから検証が必要ですが、いわゆるTOEIC IPで一般的に測れるものとは別に、大学で教えている、あるいは大学で学生さんが学んだ単語をどれだけ理解しているのか、というふうに測れないかを検討しているところであります。

検討段階というお話をしましたけども、もう一つ、大学の中でこれをどのように使っていくかということも考えながらやらないといけないところがあります。先ほどお話しましたように、TOEICのスコアというのはモニタリング指標としては使えるかもしれませんが、英語の学習成果、あるいは教育成果といったものを直接測るという意味では難しい部分もあります。安易に想像できますが、TOEICのスコアだけをもって英語教育ができていない。あるいは英語教育のカリキュラムを変えないといけないといったことは、なかなか言いにくいところがあります。

もう一つ、昨年シンポジウムで御紹介いたしましたけども、現在、山形大学ではカリキュラムチェックリストというものを作成して、科目の連続性、あるいは体系性というものも合わせて検討しています。ここで見ていきますと、必ずしも1年生以降に、学生さんの英語能

力を上げていくような科目配置になっていないプログラムが存在します。そうなりますと、なかなか英語が伸びないという問題を解消できませんので、その辺りを今後どうするかということも考えなければいけません。ただ、いろんなことを考えていく中で、やはりデータというのにも必要になってきます。測定をして現状を把握するという意味では、まず我々は先ほど御紹介いたしましたこのスコアですね。こういったものを見ながら、現在は単一年度に留まっていますが、例えば同一学部内で、1年間あるいは2年間経た後に、このスコアがどう変わっていったのかということと組み合わせながら、今後どういうふうにかリキュラムを変えていくのか、ということも考えられるのではないかとこのように認識しているところでもあります。

冒頭にお話ししましたように、まだあまり進んでいない、進められていないところの分野の一つでもあります。基盤力テストの中でも、学問基盤力についてはかなり参考にするところもありましたし、ある程度、活用できているところもございますが、国際基盤力はまだ研究開発段階のものも含まれるというところですね。少し歯切れの悪い状態ですが、私からの報告をいったん終了させていただきます。

もし、ご質問などありましたら、お受けしたいと思っております。いかがでしょうか。もし、他大学でここのようにやっているというところがあれば、ぜひ話題提供いただけると、我々はまだ暗中模索状態ですので、話題提供いただけるとありがたいかなというところもございます。いかがでしょうか。はい。では時間の関係もございますので、いったん私の方を終了させていただきます。続いて藤原先生の方から基盤力テストのBI化というところで話題提供いただきたいと思いますので、交代いたします。